

哲学館報告

石川県西田幾多郎記念哲学館は、西田幾多郎の出生地である石川県かほく市が運営する哲学の博物館である。幾多郎の直筆資料や遺品を数多く所蔵し、人物記念館としての展示を行いつつ、他方で、西田哲学だけでなく、広く哲学一般の普及を使命として市民向けの講座など哲学イベントを数多く仕掛けている。安藤忠雄設計の建築も魅力の一つで、建築を目当てにカメラを掲げて来館する観光客も多い（写真1）。今年の四月より、石川県立看護大学の浅見洋教授が館長に就任し、西田幾多郎やその哲学の研究機関としての機能も一層強化された。

私は二〇一五年の四月からこの哲学館で研究員として働いている。哲学研究者が市営の博物館で働くということはあまりないことだと思われるので、哲学館の仕事と、私がここで気付いたこと、考えさせられたことを紹介してみたい。



写真1 哲学館の外観。

一 地元、かほく市と西田幾多郎

まず、この哲学館を運営しているかほく市とその市民にとって幾多郎がどのような存在なのかを紹介しておく。

かほく市民は、アリストテレスやカントの名前は聞いたことがなくても幾多郎の事はよく知っている。幾多郎は、ここでは郷土の偉人として広く認知され、市の誇りになっているからである。「西田幾多郎」が市にとって大きな存在であることは、市のマスコットに幾多郎が愛猫家であったことにちなんだ猫のキャラクターが採用されていることから見てとれる。その黄色い猫は、幾多郎の「たろう」を取って「にゃんたろう」と名付けられている。

かほく市では子供のころから幾多郎やその哲学に触れる機会が設けられてもいる。幾多郎の母校でもあった宇ノ気小学校の正面には幾多郎の胸像があり、一昔前までは、児童たちが銅像に一礼してから登校する慣習もあった（写真2）。この学校には「西田幾多郎博士を讃



写真2 幾多郎の母校、宇ノ気小学校の壁面には、幾多郎の無の字が掲げられている。

える歌」というものもあり、いまでも、幾多郎の命日に歌われている。また、合併によりかほく市となつてからは、市内の全小学校の五年生、全中学校の二年生を対象に幾多郎と哲学について学ぶ時間も設けられている。「寸心読本」という副読本もあって、市内の小中学生は幾多郎の人となりについて驚くほど詳しい。たとえば、幾多郎が好んだ食べ物、スポーツや経歴。こうした豆知識についてのクイズであれば、当地の小中学生は哲学科の学生にも負けることはないだろう。

すべての優れた哲学者・哲学研究者が人格的にも優れているというわけではない、ということを知つてしまつている私のような哲学研究者にとつては、哲学者を偉人として讃える市民たちの熱意はいさか面映ゆい感じがしないわけではない。しかし、少なくとも幾多郎は尊敬に値する世界的な業績を残しただけでなく、豊かな人間味のあつた魅力的な人物だといえるだろう。また、子供たちが、地元から世界的な仕事をした人が出たということを知り、幾多郎を一種のヒーローとして心に抱きつつ成長していくことは、よいことだと思ふ。幾多郎を誇りに思ふこうした市民に支えられて、今の哲学館が作られてきたということも強調しておきたい。

私自身、子供たちを相手に講義をすることもある。そんな時には、哲学研究者だからこぞできることは何かを考へる。一つは、幾多郎の偉大さを伝えるだけでなく、同時に幾多郎がやったこと、つまり哲学の面白さを伝えることだと思ふ。この地の子供たちは、講師の望む答えを探すといった妙な気を使い方をあまりしないので、素直に考へることを楽しんでくれるように見える。幾多郎および哲学を誇りに思ふだけでなく、考へること自体を楽しんでいる人が育つていけばよいと思ふ。

二 資料を守る

哲学館は博物館である。つまり、物を扱う場所である。このことをめぐつて考えさせられることも多かつた。

哲学研究者は哲学的な思想の内容を研究対象としており、その内容を表現している原稿や書籍といった物そのものを直接的に対象にすることは少ない。我々が普段用いるのは全集として整備されたテキストである。よく考えてみると、全集はそのテキストが最初に表現された原稿や書籍とは異なった形態を取っている。つまりそれは同じ物ではない。それにもかかわらず哲学研究者が全集を使って研究ができるのは、研究対象が、物そのものではなく、思想の内容だからだといえるだろう。それに対して、博物館である哲学館では、思想の内容もさることながら、物そのものが主役になっている。

物は、なにもしないでいると時とともに破損や紛失によって失われてしまう。だからこそ、時に抗って物を保存するための努力が絶えず必要となる。哲学館には、展示されている以外にも多くの資料が所蔵されており、それらは、温度と湿度を管理できる特殊な収蔵庫で保管されている。また敷地内に移築された幾多郎の書斎「骨清窟」はそれ自身が登録有形文化財であるだけでなく、その中には幾多郎の蔵書が配架されている（写真3）。この収蔵庫のメンテナンスや、資料の燻蒸作業など、資料を守るための仕事も定期的に行われてい



写真3 京都から移築した幾多郎の書斎「骨清窟」。

る。また、資料は単に残すだけでなく、適切に整理・活用しなければ、他の資料の中に紛れ、忘却される危険性がある。しかし資料の整理は非常に手間がかかる作業でもある。講演会イベントなどの短期的な事業を行いつつ、長期的な視点で資料整理を進めるためには意識して資料と向き合う時間を作る必要がある。哲学館は二〇一五年から一六年にかけての展示室のリニューアル工事によって企画展を行えるコーナーを設けた。このコーナーでは、西田幾多郎の多面的な魅力を紹介するための企画展を行っているが、これには収蔵庫の資料の整理・活用を推進するという目的もある。

このように哲学館では物を守るために様々な仕事が行なわれているが、物を守ることの意義はいくつかの異なったレベルで考えることができる。たとえば、全集に未収録のテキスト資料など、思想内容そのものが利用不可能な状態に留まっている資料の保存が重要であることはいうまでもない。実際、新版西田幾多郎全集の編纂後に哲学館が新たに所蔵・把握した資料が多数ある。書簡やノート、メモ類など。こうした資料の状態を改善し、整理を進めて、その思想の内容を後世に伝えることは重要な仕事である。これ等は一度失われると、幾多郎の思想内容そのものが永遠に失われてしまうので哲学館の責任は非常に重い。

しかし、物の重要性はその思想内容だけにあるわけではない。展示室の案内をしていると、物には、現物だからこそ持ちうる力があるということに気づかされる。たとえば、幾多郎が晩年にリウマチにかかって手が不自由になった時の、大きな金釘流の文字で書かれた葉書とそのリハビリのためのゴム人形（写真4、5）。見学に来た小学生たちは、これらの物を見て、晩年になってもいつまでもものを考え、ものを書く仕事を続けようとした幾多郎の情熱を感じとっていく。この印象は、実物だからこそ与えることのできるもので年表や伝記では代用することができない。

さらに、物は、その物そのものの意味だけでなく、その物の継承の歴史を背負ってもある。哲学館に所蔵されて



写真5 リウマチのリハビリに使用した
ゴム人形。

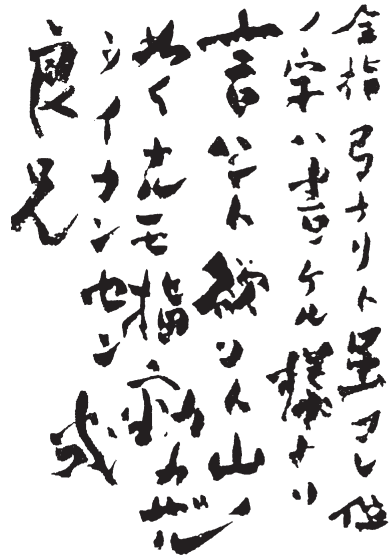


写真4 幾多郎がリウマチのリハビリに
耐え、ようやく字が書けるよう
になった頃の葉書。山本良吉宛。

いる資料には所蔵以前の歴史がある。例えば原稿「場所の自己限定としての意識作用」は、幾多郎の母校でもある新化小学校（現在の宇ノ気小学校）を中心に作られた旧宇ノ気村の新化会が生前に幾多郎から譲り受けたものである（写真6）。この新化会での資料の収集が一つの軸となつて、没後に「西田幾多郎博士頌徳会」が組織され、さらにそれが一九六八年に開館した旧西田記念館、二〇〇二年開館の西田哲学館へと発展してきた。そのなかで、この原稿は、当地の人々の手から手へと受け継がれて、守られてきたのであり、単に西田幾多郎の資料であるだけでなく、市と哲学館の歴史そのものを物語る資料でもある。また、幾多郎の関係者が譲り受けた書などを、その子孫の方から寄贈していた、たくともある。こうした場合、その書は、譲り受けた当人にとっては、人生の指針として生涯をともした大切な書であり、また子孫の方

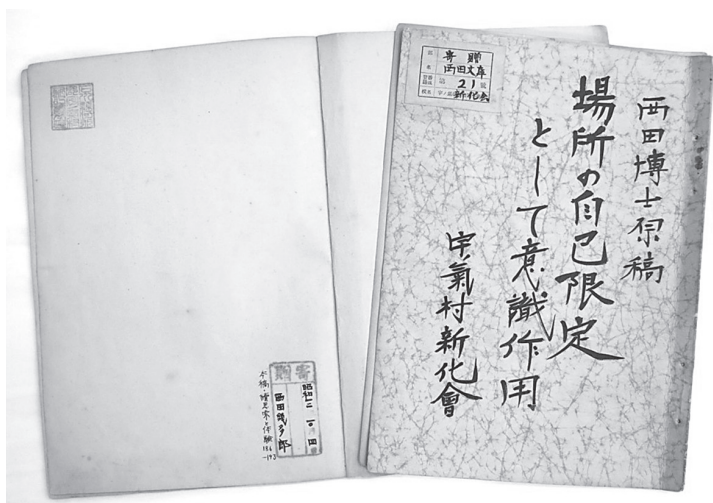


写真6 直筆原稿「場所の自己限定としての意識作用」。昭和十二年（一九三七年）に宇ノ気村に寄贈されることが分かる。

にとつては故人の思い出を含んだ形見でもある。それは、幾多郎がその書に込めた以上の様々な思いを背負っているのである。さらに、哲学館では、幾多郎の遺族の方から多くの資料を寄贈・寄託していただいているが、彼らにとつて、幾多郎は哲学者である前に、父であり、祖父である。資料に対しても、家族ならでの愛着や複雑な思いがある。博物館の仕事は、こうした様々な歴史と思いを背負った物を守る仕事である。あくまで客観的・批判的に幾多郎の思想の内容の価値だけを評価する哲学研究の態度とはかなり違った態度が、そこでは要求される。物に込められた、幾多郎の思想内容そのもの以外の、様々な思いを受け止める必要があるのである。

西田幾多郎の思想内容を未来の研究者に向けて残すこと、現物の魅力を来館者に提示すること、そして資料を継承してきた人々の思いに応えること。こうしたことを考えながら、哲学館では資料を守るための仕事が行われている。

三 人物記念館として

西田哲学の内容だけでなく、西田幾多郎の人物そのものに焦点が当てられるという点も、人物記念館の機能を持った哲学館の特徴といえるだろう。幾多郎を哲学研究の枠内で見る場合には、カントやヘーゲルなどの大哲学者、W・ヴェントやヴェインデルバント、リッカートら同時代の西洋の哲学者、そして田辺元、高橋里美、桑木巖翼といった日本の哲学者たちとの関係の中で、幾多郎をどのように位置づけるかが問題になる。彼らは、幾多郎の哲学論文の中に登場する人物である。しかし、人物記念館の観点から見て伝記的事実に目をやる時には、こうした哲学的な枠組みではなく、実生活における人間関係が問題になってくる。その際に浮かび上がってくるのは、日記や書簡の中に登場する人々である。私は哲学館に赴任して、幾多郎の伝記的事実を学ぶ中で、幾多郎の実生活において重要な意味を持った多くの人々について知ることができた。

幾多郎が京大へ赴任する直前に勤務した学習院の学生の中には政界で活躍した人が多い。文部大臣、内大臣などを歴任した木戸幸一。西園寺公望の秘書として活躍した原田熊雄。彼らは幾多郎のいた京都大学へ進学し、政界に入ってから幾多郎とのかかわりを持ち続けた。京都大学では後に総理大臣となった近衛文麿の保証人にもなっている。幾多郎が第四高等学校で学んでいた時期の友人たちは終生、彼の支えとなった。その業績と、長生のために、仏教哲学者である鈴木大拙との関係はしばしば強調される。しかし、大拙以外にも、京都大学学生監、武蔵高校校長など、教育者として活躍した山本良吉、東京帝国大学助教教授となった国文学の秀才、藤岡作太郎など、四高での友人の中には幾多郎の人脈を考える上で重要な人物は多い。彼らの先生であった四高教授、北条時敬は幾多郎が禅と本格的な学問（数学）に出会うきっかけも作っている。さらに幾多郎が第四高等学校に入る以前に目を向けると、数学者上山小三郎の私塾で机を並べた木村栄がいる。木村は「Z項」を発見した天文学者で、第一回の文化

勲章を受けた。ちなみに幾多郎は第二回の文化勲章を受章している。経済界に目をやれば、安宅産業の創始者安宅弥吉や三井合名会社社長の三井高棟との親交もある。様々な人脈の背景を探っていると、思わぬところで加賀藩の前田家につながったりもする。その外、キリスト教者たちや、英文学者などとの交友関係もある。

幾多郎とのかかわりが比較的よく知られている人々を挙げただけでも、幾多郎が哲学研究以外の広い人脈をもっていたことが分かる。こうした幾多郎の実生活についての知識は、直接に幾多郎の思想内容の理解と結びつくわけではない。けれども、それは幾多郎の人間性を浮かび上がらせるのに役に立つばかりでなく、西田幾多郎という一人の人間の生涯を通じて、明治から、大正、昭和にかけての日本における学問や文化、政治や経済の姿が浮かび上がらせる。西田、哲学の研究に劣らず、西田、幾多郎の研究も実り豊かな研究分野であると思う。

四 哲学の博物館として

哲学館は、西田幾多郎の人物記念館という側面と共に、哲学の博物館という側面をもっている。西田哲学だけでなく、哲学一般の普及を目指す博物館ということである。とはいっても、博物館として物を見せるというだけでは、哲学、つまりものを考えるということにはつながりにくい。それで、講座や講演会など様々なイベントを仕掛けて哲学の普及に努めている。

哲学館の事業の中には、伝統のあるものも多い。たとえば『善の研究』などのテクストを読む「寸心読書会」や、幾多郎の命日の前後に行われる「寸心忌記念講演会」は、それぞれ、幾多郎が亡くなった二年後、三年後の一九四七、八年にはじめられた。また、夏に合宿形式で行われる「夏期哲学講座」は今年で三六年目を迎えた。このように事業を続けてくることができた背景には、一般の方々の中での、西田哲学ないし西田幾多郎の根強い人気がある。教養主義的なエートスの中で西田哲学を受容した人や、宗教に対する関心から幾多郎の宗教哲学に惹かれ

る人など、極めて真面目で熱心な受講生が一定数いてくれることは、哲学館にとつてありがたいことである。日本哲学を専門に研究している学生や研究者が受講生として来られることも少くない。近年は、東京、長野、山口と、全国各地へ出向いて、その地の諸団体と協力をしてイベントを仕掛けることもある。

ただ、こうした所謂講演会スタイルのイベントでは敷居が高く、地元の人々が気軽に足を運ぶ、という形にはなりにくい。そこで、勉強をするというよりも、楽しむという方向で、もつと開かれた入門講座もやり始めた。そうすると、本当に気軽な気持ちで来館される方々がいる。子供を連れてくる夫婦や、ふらつと聴きに来る市内の女性たち。こうした受講生の中で講義をするのは新鮮な体験だった。大学を一步外へ出ると、一般の人々の日常的な感覚としては、学問的な正しさはそれほど重要なものではない。彼らはそれとは別の価値基準の中で生活し、彼ららの戦いをしている。こうした一般の方からすれば、哲学館へ来て、何かを学ぶということは、余暇の楽しみ以外の何ものでもないのです。学問的にどれだけ進んだかではなく、楽しかったかどうか、講義の良し悪しを判定する基準となる。ふりかえってみると、私を含め、哲学研究者は研究することが楽しいから研究を始め、続けてきたはずである。しかし、我々が感じている学問の楽しさとはいったい何なのか、それは広く一般の方々にも共有できるものなのか。一般の方を相手にした講義の中には、こうした事柄が問い直される瞬間がある。大学の外にいて、一般の市民の方々の中で仕事をしながら、哲学の意義、学問の意義を考えることができるのは哲学館ならではであるだろう。

哲学館での様々な仕事と経験をつうじて私は多くのことを考えさせられた。それを一言で言い表すことは難しいが、大きくいえば学術研究の背景にあるものに対する気付きである。哲学館の場合、地元の人々に支えられて現在のような充実した研究と教育の場になっているが、どんな学術研究も、研究者だけでは成立せず、それを支える

人々と制度が必要なのだろう。また全集などのテキストの背景には資料を守る博物館などの仕事があること、西田幾多郎も、哲学者である前に、ひとりの人間であるということにも気づかされた。そして、大学の外から、一般の方々の感覚で、哲学や学術研究の意義を考え直す体験もした。大学で研究をしていたのでは見えていなかった、こうした多くの気づきに出会う機会を与えられたことに感謝したい。

参考文献

- 大熊玄編『西田幾多郎の世界』（石川県西田幾多郎記念哲学館、二〇〇四年）
竹田篤司編「人名解説と索引」（『西田幾多郎全集第十七巻、日記Ⅰ』岩波書店、二〇〇五年）
藤田正勝編「人名解説と索引」（『西田幾多郎全集第十八巻、日記Ⅱ』岩波書店、二〇〇五年）

（筆者 なかじま・ゆうた 石川県西田幾多郎記念哲学館研究員／日本哲学史）